

体をひらく、  
心をひらく

第九回

# 黙々として受け止めた父の愛

●野口整体気・自然健康保持会 指導補佐  
金井とも子

## 紛争の絶えない国で

先月号で紹介した二十代の青年タカシくんは、国連の仕事でアフガニスタンへ赴任しています。この国は、ご存じのように、ソ連の侵攻、民族紛争、テロと、三十年の長きにわたって争いが絶え間なく続いてきました。タカシくんが生まれる以前から、戦争によって、人間の荒野が出来上がってしまっています。この国の青年は、かつての緑豊かな農業国時代を知らず、憎しみや苦しみだけが記憶されている人間社会

に生きてきたこととなります。

平和を享受したことがない人間は、人の温かさや豊かで明るい暮らしが想像できず、「こうすればこのように良くなる」とイメージすることさえできません。良き方向への想念が身体にないと、意識改革によって「物事を現実結びつけるのが大変」とはタカシくんの実感です。日本とはまったく異なる社会で、彼は今、子どもどものころに描いた夢を自らの中心に据えて、成長しています。

アメリカで生まれたタカシくんは、二歳で帰国し、父の仕

事の關係で中学の初めに再びアメリカでの暮らしに入りまし  
た。そこでは日本の学校のような楽しさはなく、気持ちの通  
い合う友達も持てず、孤独な日々を余儀なくされました。

中学一年生と言え、他を意識し、自分と他の違いが頭で  
分かり、理解力に広がりを持ち始める年頃です。この時期の  
男の子は、一人の男性として人格を尊重し、言葉によって語  
りかけていくことで身体に一つひとつ自覚させていくことが  
大切ですが、彼の両親は彼に一言も説明せずにアメリカ行き  
を決めてしまい、彼の気持ちを無視してしまつたのです。

その結果、父に対して不服な思いを持ちながらも、逆らう  
こともできず、気持ちを張り詰めることで自分を保つていた  
ところがありました。親の仕事の都合と頭では分かつていて  
も、身体で消化できる年頃ではありません。結果、彼は鬱的  
になつていきました。

それでも、時を経るごとに少しずつ気持ちも治まり、明る  
い自分を取り戻しつつ十五歳を迎え、学校生活もこれから楽  
しくなると思われた矢先、再び父親の仕事の都合で、校則が  
厳しく、受験生活が待っている日本に帰国することになつた  
のです。彼はまたここで、気持ちの建て直しをしなければな  
りませんでした。まるで自分の自由を奪われたような感覚が  
彼の身体を支配し、怒りの矛先を父親に向けたのです。

十六、七歳の思春期は、身体の勢いが裡から外に向けて活  
動していく時期です。そのことについて野口晴哉先生は、「こ  
の年頃は、一生のうちに最も身体の『性エネルギー』が盛ん  
になる時期ですが、男女の性によって消化できずに、そのエ  
ネルギーが内攻すると、小さな問題に対しても深く傷つき、

身体の『こり』となり、その力を負の方向に決めてしまう」  
とおっしゃっています。

思春期は、頭に分からせるのではなく、内なる体の勢いを  
どのように使い、心を中心に置けるように育てるかです。

自らの意思に反して帰国せざるを得なかつたタカシくんの  
心はしだいに荒れ、校内一の不良となつていきました。無期  
停学になること、三回。「やらないことは人殺しだけだつた」  
とは本人の弁ですが、不良も相当なものだつたようです。そ  
の不良生活に終止符を打つたのは、両親の、息子への深い愛  
情でした。荒れ果ててゆく息子に対して、両親は他人の力を  
頼みとせず、荒れた心の奥にある素直な心に少しずつ近づ  
いていったのです。

## 父と息子の時間

二回目の無期停学のとき、父はタカシくんを浜へ連れて行  
き、一言も意見のような言葉を発することなく、ゴミ拾いを  
始め、それは一日中続きました。肩で風を切つて不良をやつ  
ていた彼は、父親のあとについてゴミ拾いをしながら、父が  
自分のために気持ちを砕き、寄り添ってくれている気持ちを  
感じ始めていました。しかし、そのような深いところでの気  
持ちは裏腹に、身体のエネルギーの荒れた日々は続いたの  
です。

三回目の無期停学を迎えてしまいました。父親は一段と真  
剣に彼を受け止め、父と息子とが真正面からぶつかり合う  
日々が繰り返られました。怒鳴り、暴れたりの幾日を経て、

父親自身も自らと向き合ったのでしよう。「今しかない」という気持ちが大波のようにタカシくん心に押し寄せ、その気持ちで身体が暖かくなり、嵐が去った後のように心が落ち着いていったといいます。人間は真つ直ぐに相手の愛情を感じ取ったときに、落ち着きと静けさが身体より生まれます。

禅の世界に「和敬静寂」という言葉があります。お互いを認め合うことによつて、静けさが生まれるということです。ここが大切です。普通は、何かを言い聞かせたり、話し合いになつてしましますが、そうではなく、お互いを認め合うということなのです。これは父親の落ち着きと心の広さを必要とするところですが、不良の彼をそのまま受け入れたことを、子どもに分からせたのです。

そうした気持ちで彼を楽にし、身体力のみが取れると同時に、彼は母親の温かさも思い出していました。彼が小学生のとき、象牙採集のためにアフリカで象が密猟により殺されているのを知り、それを母へ伝えると、一所懸命に調べてくれたのです。「転勤で環境が変わり、寂しい思いをしてきたけれど、両親は僕と向き合ってくれていたことが、はつきり自覚でき、本当に嬉しかった」と、少年のようないい顔を見せて語ってくれました。

大人にとつて何気ないことが、子どもの身体の奥に無意識に入り込んで、彼を荒れさせることになつてしまったのです。荒れたときでもかつて身体に受けた温かさや人間の中にある優しさが一つに繋がつて、彼は人を信じることができるようになり、立ち直りました。人間はこのように、温かい気持ち欲しくて生きているのかもしれない。「両親があな

たの問題で、他を頼りにしていたら？」と聞いてみると、彼は、「不良は治まったとしても、親に不納得を抱いたままに育ち、その発露が、形を変えて出たかも」と言いました。

親が自らを信として、人間の生き方を伝え、事を避けずに真正面から向き合つて愛情の深さを感じさせること。これが子どもを豊かに大きく成長させます。親と子とは合わせ鏡のようなものです。

かつて彼は、マザー・テレサに会い、頭に手を差し伸べてもらったことがあります。その時、身体で「大きな魂」を感じ取ったのでしょうか。その出会いによつて人のために自分を遣つて生きたいという気持ちが芽生えたのです。

今、彼は、アフガニスタンの任務を終えたのち、小学生の頃に母が懸命に調べてくれた象の密猟の問題やさまざまな問題を抱えているアフリカへの任務を希望しています。こうして、タカシくんは自分の身体を出つ張らせたり、へこませたりさせながら、子ども時代の「こころざし」を活かしております。

ぜひ、大人たちが若者ときちんと向き合い、日本人の良き力を育ててほしいと思います。



体をひらく、  
心をひらく

金井とも子 かない・ともこ  
一九三九年(昭和十四)生。野口整体気・自然健康保持  
会指導補佐。七五年活元コンサルタント取得。九一年より  
整体指導補佐として整体指導を求めて道場に訪れる人た  
ちの相談役を務める。現在は活元指導の会も行っている。  
ホームページ <http://www.ne.jp/asahi/kuishizenku/>